

星合操
官能の美学

星合操



北徳夫人の宴

体の中心が
かゆいように
疼いていた…

知らず知らず
そこに
手を伸ばしていた
私は

その
熱さに
驚き

夢中で
そこから
逃げだした



そこに
強く手を
押しあてる

甘酸っぱい
不思議な
感覚が
体中に広がり…



だめっ
いけないわ！

こんな事
いけない事よ！

いけない事だと
私は強く自分に
言い聞かせ

そして
おそらく
必要以上に
そうゆう事から…
男性から
身を遠ざけて
きた

夫との夜が
私の
初めての経験だった…

その初めての夜から
私はこの体の
業の深さを
思い知らされた


夫の
優しい愛撫は
私の体に
火を灯した
……

…けれど
優しさだけでは
その火が
燃え上がる
事はない

もつと強い…
もつと激しい
ものが欲しい…!!



…夫には言えない



プロポーズの時


夫は私の事を
「清纯そうて惹かれた」と
そう言ってくれたわ

こんな事…
とても


言える事じゃ
ないわ

それに何より

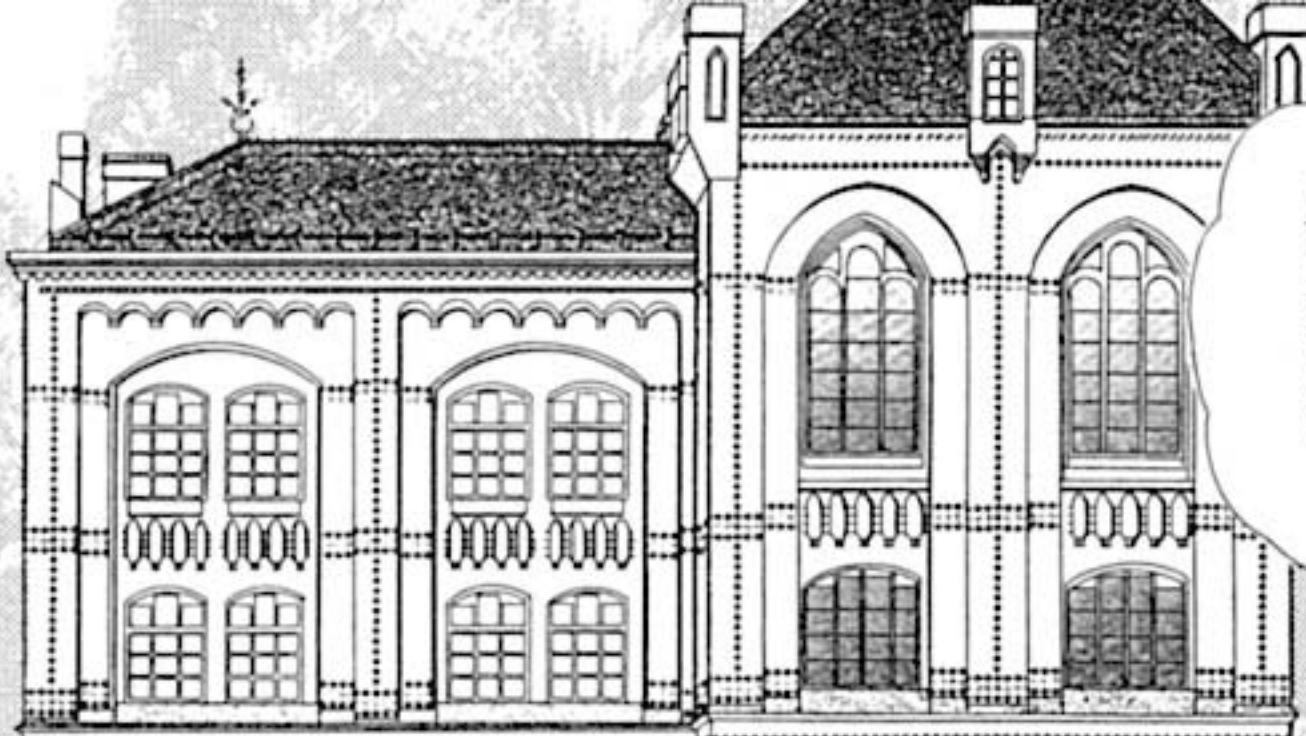
私は夫を
愛している



夫との
幸福な生活を
大切にしたい



こんな事は
たいして重要な
事じゃないわ
………



主人は
まだ
戻らないの？

先程
駅から
電話があつて
うちの人が
迎えに
行きましたよ

もう
間もなく
戻りますよ

食事の用意は
もう大丈夫ね？
手ぬかりは
ない？

ワインは
冷えて
いたかしら？

奥様

少し
じっとして
座っていて
くださいな
大丈夫ですよ
もう全部
用意はできてます

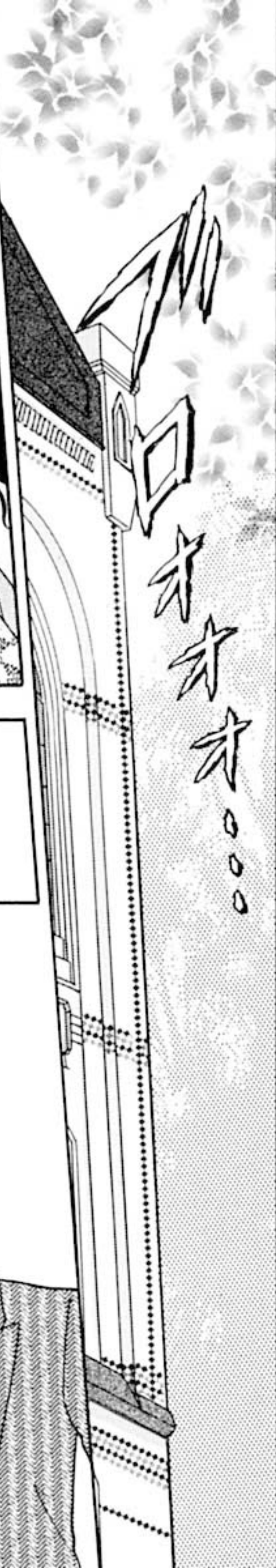
本当に
奥様は
だんな様が
いらつしやらないと
いてもたつても
いられないん
だから

それは：
夫が仕事のために
家をあけ
10日ぶりに
戻ってくる日の
事だった

早く夫に
会いたかった

結婚して以来
こんなに長く
離れて過ごしたのは
初めてだった







はじめまして

紹介するよ
友人の
ジャン・ルイだ

夫は
金髪の男性を
伴っていた



おや
大変だ
夕食を
1人前
増やさ
なくちゃね



え：
ええ
もちろん

しばらく
ここに
滞在してもらおう
つもりなんだが
かまわない
だろうか？



ジャン・ルイは
以前僕が
フランスに
来ていた時の
友人なんだ

拓也が
結婚したと聞いて
奥様とどうしても
お会いしたくて
おしかけたんですよ



すみません
うかがっていただ
用意して
いたのですけど

いいえ
気をつかわないで
ください

僕が強引に
おしかけたん
ですから



想像していたより
ずっと
おきれいな方だ

東洋の女性は
実に
神秘的で
美しい



ほめられる事に
厭な気持ち
するはずは
なかつたのだが…

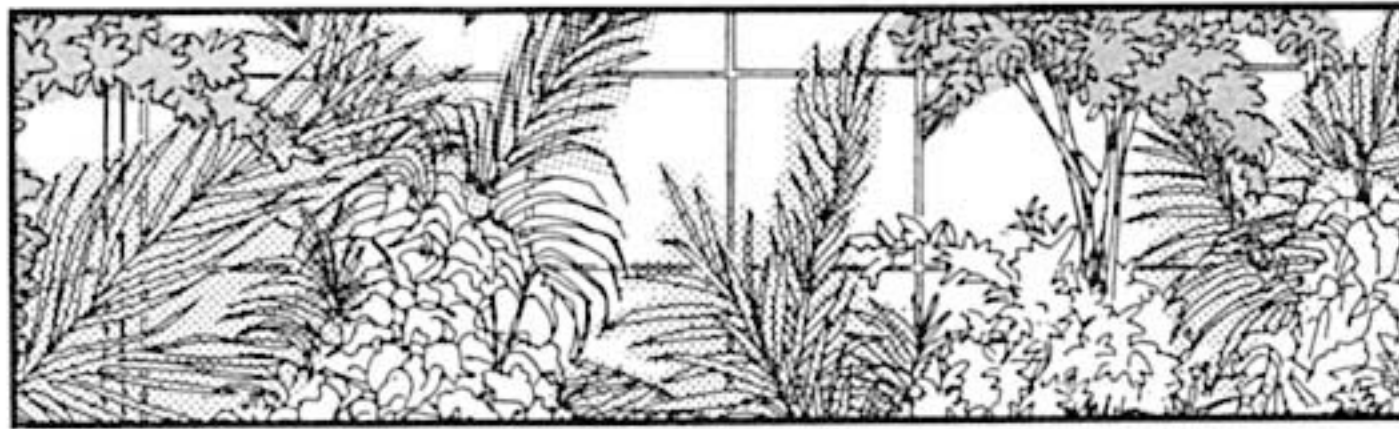
じつと見つめる
水晶のような
彼の瞳が



なぜか
私を
胸さわぎのする
不安に
包んでいった



翌朝
夫はジャン・ルイと
乗馬に
でかけて行つた

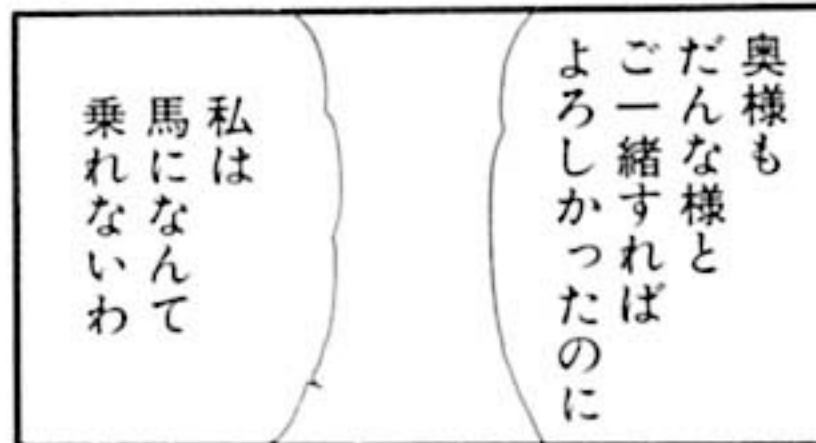


やる事が
ないんですもの



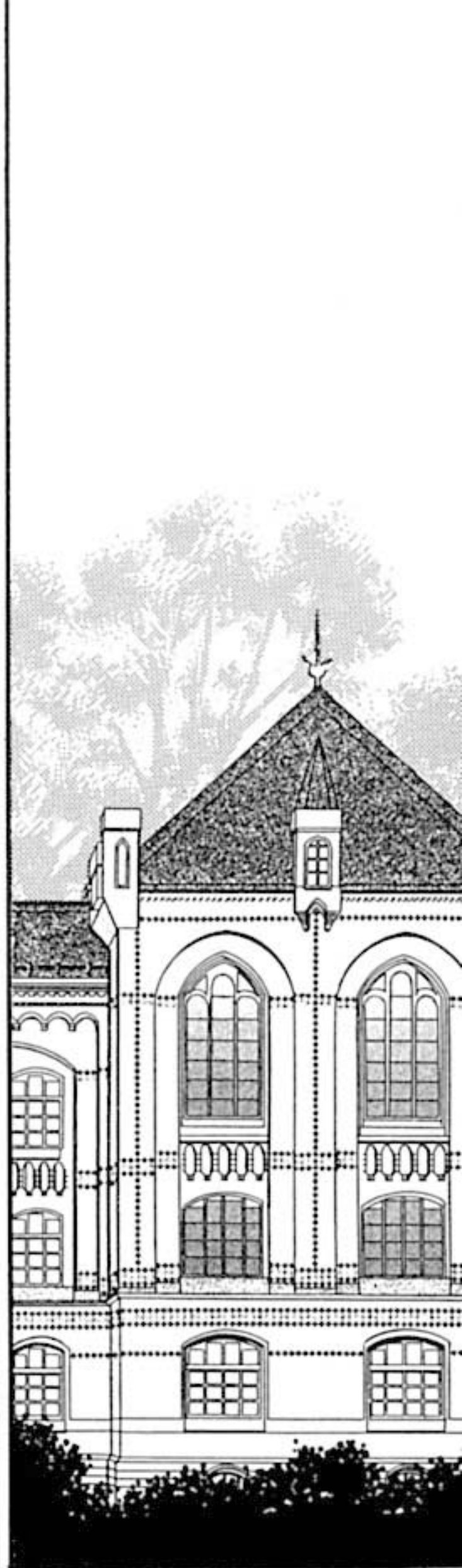
お花の世話は
私がやるわ

いいんですか？



奥様も
だんな様と
ご一緒すれば
よろしかったのに

私は
馬になんて
乗れないわ



…つまらないわ

せつかく
10日ぶりに
夫と過ごせると
楽しみに
していたのに